

インタビュー場面における動詞の否定丁寧形の使用とその要因について

——韓国日本語学習者の発話データから——

澤 邊 裕 子¹・相 澤 由 佳²

1.はじめに

本稿ではインタビュー場面における日本語学習者（以下、学習者とする）の動詞の否定丁寧形の使用とその要因を取り上げる。現代日本語の動詞の否定丁寧形には「(食べ) ません／(食べ) ませんでした」(以下、「ません」形とする)と「(食べ) ないです／(食べ) なかったです」(以下、「ないです」形とする)の2つの形式が存在する。日本語母語話者の否定丁寧形の使用実態に関しては、若年層(大学生・専門学校生)を対象として調査した野田(2004)が自然談話において「ないです」形の使用割合が約60%であったこと、小林(2005)が日常会話において「ないです」形の使用が約7割(67.7%)あったことを報告しており、どちらの調査においても話し言葉においては「ないです」形の使用がかなり高いことが明らかにされている。このような現象を金澤(2008:72)は「文脈や状況による差はあるとしても、全体としては『ません』⇒『ないです』の傾向が進んでいる」と述べ、言語変化の一つとして取り上げている。

これら否定丁寧形の2形式の使い分けに関して学習者の発話資料を分析したものには川口(2006)、澤邊・相澤(2008)がある。川口(2006)は国内における学習者の否定丁寧形の選択傾向について調査し、初・中級レベルの学習者のほうが規範形である「ません」形を、上級レベルの学習者が「ないです」形を多く用いる傾向にあることを明らかにした。一方、澤邊・相澤(2008)は母語話者の「ゆれ」が海外での日本語教育や学習者の日本語学習に与える影響を明らかにすることを目的として、名詞、イ形容詞、動詞の否定丁寧形に関して学習者向け文法学習書・日本語教科書における扱い、自然な言い方に

【注】

¹宮城学院女子大学²聖潔大学校

関する学習者の意識、インタビューにおける使用傾向について調査した。その結果、品詞によって違いが見られるものの、「ないです」形の広がりには韓国における学習者にも見られると述べている。しかしその要因、背景についてはこれまでの研究において十分に明らかになっておらず、今後の課題だとされている。

本稿は澤邊・相澤(2008)に連なるもので、海外の学習者の「ないです」形使用傾向を明らかにし、その要因を考察することを目的としている。今回は動詞の否定丁寧形に焦点を絞る。その理由は、動詞の場合、日本語の教科書や教室において規範的な形「ません」形が扱われるのがほとんどで、「ないです」形は教室でのインプットの影響が大きくなく、その使用には他の要因が作用している可能性がより明確になると考えたからである。

本稿ではインタビューテスト(OPI³)における学習者の発話データを扱う。まず、インタビューテストにおける母語話者の質問(インプット)と学習者の応答(アウトプット)のデータから、「ないです」形の使用の実態を探る。次にアンケート調査により「ないです」形の使用者の背景を探り、規範の逸脱形とされる動詞の「ないです」形の使用要因について考察する。具体的な研究課題と調査方法は3. で述べることとする。

2. 学習者の否定形の習得に関する先行研究

海外の学習者が動詞の否定丁寧形を習得する要因としては、①教室での指導、②自然習得が可能性として考えられる。このうち、①教室での指導に関しては、動詞の「ないです」形が定着するような練習を行っていることは現在のところ多くないと思われる。しかし、教室内のインプットとして、教師や他の学習者が使用していたり、教室外でインプットを受けたりする可能性は十分に考えられる。また、自然習得の可能性としてもう一つは学習者自らが文法を作るという独自の文法習得の可能性も考えられる。ここでは学習者の否定形の自然習得に関して「周囲からのインプット」、「独自の文法習得」の観点から論じた先行研究に触れる。

【注】

³Oral Proficiency Interview の略。

2.1 周囲からのインプット

森山・バイルマー (2009) は学習者の周囲で使用されている日本語発話 (インプット) に含まれる否定形の頻度を調べ、習得プロセスとの関係を考察した。データとしては日本語母語話者の発話データを集めた「上村コーパス⁴」を用い、このコーパスの中から20名 (男10名、女10名) を選び、そこで使用されていた動詞と形容詞の否定形を分析している。ここで分析対象となったのはナイで終わる形 (～ナイ、～ナイデス) の否定形であり、「ません」形は対象とされていない。

分析の結果、動詞の否定形の使用は形容詞の否定形の使用に比べて10倍以上であったとしている。森山・バイルマー (2009) はこのようなインプットの種類と頻度をBybee (2008) に基づき、その表現を認知処理上1つの固まりとして定着させる「トークン頻度 (token frequency)」と生産的なスキーマとして定着させる「タイプ頻度 (type frequency)」とに区別し、説明することを試みている。そして、動詞の否定形の習得に関して以下の2点を指摘している。

- ① 主な動詞はトークン頻度の高さから固まりとして習得される可能性が高い⁵。
- ② 一段動詞、ラ・カ・ワ行五段動詞などはスキーマが抽出され、生産性を持ち、産出に用いられる可能性がある。但し一段動詞とラ行五段動詞のように活用ルールが紛らわしく、スキーマが抽出されにくい動詞もあるであろう。(p. 323)

この調査では「ない」と「ないです」の使用が分けられていないため、否定丁寧形「ないです」形のみを使用頻度を知ることはできない。また、「ません」形の使用頻度と比較してその数が多いのか否かも不明だが、母語話者の発話においてかなりの頻度で動詞の否定形が使用され、特に主な動詞の「ない」の形を学習者が耳にする可能性が示唆されていると言えよう。しかし、実際にそれが学習者自身の発話における使用、つまりアウトプットに繋がっているかどうかは明らかにならず、学習者の発話データと学習者

【注】

⁴<http://www.env.kitakyu-u.ac.jp/corpus/>

⁵ 「わからない (使用頻度38)」「いけない (同37)」「いない (同26)」「しない (同25)」「できない (同20)」「 shouldn't (同12)」「行かない (同11)」「ならない (同10)」「燃えない (同7)」などのようにトークン頻度が3以上になるものは24個と動詞全体の4分の1を占め、固まりとして覚えてしまう動詞が少なくないだろうと考察している。

周囲のインプットのデータとの照合は今後の課題とされている。

①の「主な動詞」というのが初級段階で学習される基本的な動詞のことだとするならば、基本動詞は固まりとして習得される可能性が高いという仮説、また②について一段動詞、ラ・カ・ワ行五段動詞は日本語教育においてそれぞれⅡ類動詞、ラ・カ・ワ行のⅠ類動詞という用語で捉えられるが⁶、これらの動詞は産出に用いられやすいという仮説が導かれる。学習者自身の発話に上記のような特徴が見いだせれば、周囲からのインプットが学習者の動詞の否定形の習得に影響を与えた可能性を指摘できるだろう。

2.2 独自の文法習得

近年の第二言語としての日本語習得研究において、「学習者は独自の文法を作り出す」とされ(野田他2001)、学習者は教師に教えられた文法規則とは異なった、学習者独自の文法規則を作り上げることがあると指摘されている。この学習者独自の文法はさまざまなタイプの言語処理のストラテジーによって作られており、否定形を作り出す学習者の文法処理方法についても先行研究によって幾つかの知見を与えられている。

家村(2001)は成人の中国語母語話者に対する縦断的な発話調査を行い、品詞ごとの否定形の発達過程、及び品詞間の否定形の習得順序の解明を試みた。調査の結果、否定形の発達過程の中で「*安いじゃない」「*安くじゃない」「*安じゃない」「*食べじゃない」「*安いくない」「*きれくない」等、「じゃない」や「くない」を伴った誤用の形態が多く観察されたとし、これらは「じゃない」や「くない」を分析できないひと固まりの否定辞として認知し、そうした誤用は品詞を考慮せずに単に付加することから起きると推察している。こうしたストラテジーを家村・迫田(2001)は学習者の否定形成のストラテジーだとし、第二言語の習得に影響を与えるものだとしている。

また、成人中国語母語話者に共通して見られた動詞の否定形の発達過程については以下のようにまとめている。「活用混合型」とは「*起きらない」「*乗ない」「*書かない」のようにⅠ類動詞とⅡ類動詞の活用の混合から来る誤用、「じゃない」は「*働くじゃない」「*働きじゃない」のように様々な活用形に「じゃない」を使用した形態、「辞書形+ない」とは「*書かない」「*

【注】

⁶ Ⅰ類動詞は1グループの動詞、Ⅱ類動詞は2グループの動詞とも言われる。

書くません」のように辞書形に「ない」や「ません」を使用した例である。

動詞の否定形の発達過程(家村2001:77)

正用形	正用形	正用形	
*活用混合型	→*活用混合型	→*活用混合型	→ 正用形
*じゃない	*じゃない		
*辞書形+ない			

このように、中国語母語話者のデータをもとに家村(2001)は学習者の否定形成ストラテジーが存在すること、また、動詞の否定形には誤用の消滅に順序が見られること、すなわち、まず「辞書形+ない」が消滅し、次いで「じゃない」、最後に「活用混合型」が消滅し正用に至ることを明らかにした。しかし、この調査では「じゃありません>じゃないです>じゃない」の順に習得が進むといったような体系的な発達過程や、丁寧体と普通体といった文体の違いによる発達過程の相違点はデータの中で見いだせなかったとし、その点については論じられていない。

本稿では、学習者の発話データに現れた否定丁寧形の誤用も分析対象に加える。否定丁寧形を産出しようとする学習者の発話の中に、否定丁寧形習得過程を明らかにするヒントがあり、それが海外の学習者の「ないです」形使用の要因に繋がる可能性があると考えからである。

3. 研究課題と調査方法

以上のことから、本稿では以下の研究課題を設定する。

- 1) 海外で日本語を学ぶ学習者の動詞の否定丁寧形の使用実態はどうか。
 - －「ないです」形の使用に関して、レベルによる違い、動詞の難易度や活用グループによる違いは見出せるか。また、否定丁寧形の誤用から見出される特徴はあるか。
 - 2) 「ないです」形を使用した学習者はどのような学習環境の中で学び、2形式についてどのような意識を持っているのか。
 - －周囲からのインプットが多い環境で学んでいるのか、教室で学んだ経験があるのか。また、2形式の使い分けをどのように捉えているのか。
- 以上の点について明らかにするために研究課題1)に関しては、2007年8

月から12月にかけて韓国で日本語を学ぶ大学生60名を対象として行ったOPIインタビューの文字化資料を基に分析する。2) に関してはインタビュー対象者に対し質問紙調査を行った結果を基に考察する。なお、本稿で対象とする「ないです」形は「ません」形と「ないです」形の対立を持つ動詞の否定丁寧形を扱うこととする⁷。

4. 結果と考察

4.1 否定丁寧形の使用の実態－「ないです」形使用

動詞の否定丁寧形の使用は278例あり、「ません」形の使用は241、「ないです」形の使用はインタビューを行った60名中25名の発話の中に37例あった。インタビューではテスター⁸が質問をし、それに対して被験者(S)が回答をする形となっている。そのため、回答はテスターの質問の文の形に影響を受ける可能性がある。例えば、次のような形のものである。

例1 テスターが「ないです」形で質問し、Sが「ないです」形で答えている
T: おでかけするとかいうときはあまりしないですか。
S: 私、あまりしないです。

本稿では上記のような例を除き、下の例2のようにテスターの質問文の形に影響を受けずに「ないです」形を使用していると考えられる例を抽出した。

例2
T: 勉強はしますか。
S: いえ (笑い)、正直しないです。

【注】

⁷ 動詞の「ありません」は形容詞の「ないです」と対立するため、考察の対象から外している。こうした基準は川口(2010)に基づいた。

⁸ OPIインタビューを実施し、レベル判定を行うテスターのこと。本調査ではテスター資格を持つ筆者らが行った。

4. 1. 1 レベルによる分析結果

OPIのレベル判定⁹を行った結果、初級13名、中級34名、上級6名合計53名の学習者の発話の中に動詞の否定丁寧形の使用が見られた。そのうち、「ないです」形の使用者は、初級1名(7.7%)、中級19名(55.9%)、上級5名(83.3%)の合計25名であった。この結果から、動詞の否定丁寧形を用いた学習者のうち、半数近くが「ないです」形を用いており、さらに日本語の口頭能力のレベルが上がるにつれて「ないです」形の使用割合が増えていることがうかがえる。

4. 1. 2 使用された動詞に関する分析結果

使用された動詞の種類は35で、可能形で用いられているのは6語あった。それらの動詞を表1に挙げ、「ないです」の使用例数をカッコ内に示す。日本語能力試験¹⁰の『出題基準』による語彙レベルと照合すると4級、3級レベルの初級レベルの基本動詞がほとんどであり、2級の語は3語だけであったが、そのうち「気に入る」「しゃべる」の否定形は「ないです」形での使用であった。また、森山・バヤルマー(2009)は「わかる」「いける」「いる」「する」「できる」「行く」「なる」などのトークン頻度の高い主な動詞について、「わからない」「いけない」など固まりで習得される可能性が高いと述べているが今回のデータにおいてそのような傾向は特に見られず、むしろ、「わかる」は初級、中級段階の学習者の発話において「ません」形での使用が圧倒的に多く見られた。さらに動詞のグループの観点から結果から「ないです」形が使用されていたものを取り上げてみると、それぞれ1回しか使用頻度がないものが多く(20語中15語は1回のみ)、複数回使用されていた動詞はⅠ類動詞の「行く」(2回)、「わかる」(3回)、Ⅱ類動詞「いる」(7回)、「食べる」(2回)、Ⅲ類動詞の「する」(4回)の4語のみであった。使用頻度数が少ないため、この中の動詞について傾向を見ることは難しいが、最も使用頻度が高かった「いる」がⅡ類動詞であったことは森山・バヤ

【注】

⁹OPIでは超級、上級(上、中、下)、中級(上、中、下)、初級(上、中、下)の全部で10のレベルを設定している。本稿では上、中、下の下位レベル別の考察は行わず、超級、上級、中級、初級の4つのレベルに分けた。

¹⁰2010年度から実施される新しい日本語能力試験では出題基準が設けられておらず、「級」という名称もなくなった。本稿では2009年度までの日本語能力試験の出題基準の語彙レベルとの照合を行っている。

ルマー (2008)が、Ⅱ類動詞を「ない」の形を産出しやすい動詞として挙げていることと繋がる。しかしながら同様に活用するⅡ類動詞の「見る」は11回使用されているが、その全てが「ないです」形ではなく「ません」形であったことを照らし合わせると、必ずしもⅡ類動詞であるから「ないです」形が産出されやすくなっているとは言えないだろう。この結果からは周囲のインプットが学習者の「ないです」形使用に強く影響を与えていると結論づけることは難しいと思われるが、今後も継続してデータを収集し、検証する必要がある。

表1 使用された動詞(可能形含む) 一覧(「ないです」形使用頻度の高い順)
()内の数字は「ないです」の使用例数

	語彙レベル	動詞グループ	初級	中級	上級	合計
1) いる	4級	Ⅱ類動詞	4(1)	24(3)	9(3)	37(7)
2) する	4級	Ⅲ類動詞	3	14(3)	4(1)	21(4)
3) わかる	4級	Ⅰ類動詞	50	40(2)	3(1)	93(3)
4) 知る	4級	Ⅰ類動詞	0	7(3)	0	7(3)
5) 食べる	4級	Ⅱ類動詞	5	8(2)	0	13(2)
6) 行く	4級	Ⅰ類動詞	1	8(2)	3	12(2)
7) 作る	4級	Ⅰ類動詞	3	4(1)	0	7(1)
8) 出る	4級	Ⅱ類動詞	0	4(1)	0	4(1)
9) 聞く	4級	Ⅰ類動詞	0	3(1)	0	3(1)
10) 来る	4級	Ⅲ類動詞	0	3(1)	0	3(1)
11) 吸う	4級	Ⅰ類動詞	0	1	2(1)	3(1)
12) なる	4級	Ⅰ類動詞	0	1	2(1)	3(1)
13) 売る	4級	Ⅰ類動詞	0	2(1)	0	2(1)
14) かまう	3級	Ⅰ類動詞	0	2(1)	0	2(1)
15) 変わる	3級	Ⅰ類動詞	0	2(1)	0	2(1)
16) 気に入る	2級	Ⅰ類動詞	0	2(1)	0	2(1)
17) しゃべる	2級	Ⅰ類動詞	0	0	2(1)	2(1)
18) 住む	4級	Ⅰ類動詞	0	2(1)	0	2(1)
19) 出す	4級	Ⅰ類動詞	0	2(1)	0	2(1)

20)弾く	4級	I 類動詞	0	2(1)	0	2(1)
21)持つ	4級	I 類動詞	0	2(1)	0	2(1)
22)忘れる	4級	II 類動詞	0	2(1)	0	2(1)
23)見る	4級	II 類動詞	1	10	0	11(0)
24)飲む	4級	I 類動詞	6	3	1	10(0)
25)できる	4級	II 類動詞	1	7	0	8(0)
26)会う	4級	I 類動詞	1	3	0	4(0)
27)言える	4級	II 類動詞	0	2	0	2(0)
28)覚える	4級	II 類動詞	0	2	0	2(0)
29)食べれる	級外	II 類動詞	0	2	0	2(0)
30)役に立つ	3級	I 類動詞	0	2	0	2(0)
31)入れる	4級	II 類動詞	1	0	0	1(0)
32)歌える	4級	II 類動詞	0	1	0	1(0)
33)思い出す	3級	I 類動詞	0	0	1	1(0)
34)買う	4級	I 類動詞	0	1	0	1(0)
35)通う	3級	I 類動詞	0	1	0	1(0)
36)くれる	3級	II 類動詞	0	1	0	1(0)
37)食べられる	3級	II 類動詞	0	1	0	1(0)
38)出かける	4級	II 類動詞	0	1	0	1(0)
39)学ぶ	2級	I 類動詞	1	0	0	1(0)
40)見られる	3級	II 類動詞	0	1	0	1(0)
41)もらう	3級	I 類動詞	0	1	0	1(0)
合計			77(1)	174(28)	27(8)	278(37)

4. 1. 2 否定丁寧形の誤用に関する分析結果

次に、発話データの中に現れた学習者の動詞の否定丁寧形の誤用を取り上げる。誤用は以下に示す4名の学習者の発話の中に見られた。

誤用例1 学習者A (初級)

T: ストーリーは覚えていますか。

S: ストーリーはわかりますけど、話すが…私が…*話しないです。

誤用例2 学習者B (初級)

T: どの映画館ですか。

S: …*考えじゃない…ありません。

誤用例3 学習者C (初級)

T: 写真はだれがとってくれましたか。

S: *考えないです。

誤用例4 学習者D (初級)

T: 韓国にはいますか? たくさん。

S: いいえ。韓国にも、…いいと…*人がないです。

これらの誤用に共通する傾向は「ないです」形を用いようとしていることである。誤用例1はストーリーの内容を聞かれたのに対し、「ストーリーはわかるが、話すことができない。(説明ができない)」というメッセージを伝えようとしているものである。「*話しません」は「話せません」の誤用と考えられる。誤用例2は、どの映画館かと尋ねられ、場所をうまく答えられなかったものである。「*考えじゃない…ありません」という答えは「思い出せない」という意味を伝えようとしているものと思われる。ここでは使用する動詞の選択と否定形の作り方の両方で誤りとなっているが、「じゃない」については日本語学習者が持つ否定形の付加のストラテジーとしての可能性が先行研究でも指摘されている。つまり、日本語学習者は「じゃない」を分析できない固まりと捉え、否定の機能を表す語として名詞だけでなく否定したい形容詞や動詞の後にも付加している可能性があるというものである。誤用例2は、否定の機能を表す語として「ありません」も分析できない固まりと捉えて動詞に付加しようとした可能性も考えられる。

誤用例3も誤用例2の答えと同様に「覚えていない。思い出せない。」という意味を伝えようとした発話であると推測される。動詞の選択に誤りがあるが「考える」という動詞の活用としては誤りではなく、「ないです」形での使用となっている。「考える」という動詞の「ない形」である「考えない」に繫辞「です」を付加することによって否定のメッセージと丁寧な気持ちを表そうとしているのではないかと思われる。

誤用例4は「人がいない」という否定の意味を伝えようとして「*人がないです」という発話になってしまったものと考えられる。日本語では生物に対して「いない」、無生物に対して「ない」を使うのに対し、韓国語の「ない」を表す語「없다 (opta)」は、生物、無生物どちらにも使うことができる。これも単語選択の誤りであるが「いない」という否定の意味を伝えようとする際に「ないです」形が用いられようとしていたことがわかる。ただし、この文中の「ない」は動詞の否定形ではなく、形容詞の「ない」である。

これら4つの誤用例は全て初級段階の学習者に見られたものであった。

4. 1. 1において初級段階の学習者の動詞の否定丁寧形の使用は「ません」形のほうが多いという結果が得られたが、誤用を見てみると「ないです」形が見られる。中級段階の学習者になると活用に誤りが少ない「ないです」形が用いられる割合が高くなるが、初級段階に見られたこれらの誤用は中級段階へと移行する過渡期にある学習者が生み出したもののようにも思われる。

4. 2 「ないです」形使用者の背景

4. 2. 1 インプット環境

本稿では学習者周囲からの自然な日本語のインプットの可能性として「日本滞在歴」「日本語で話す友人の有無」「日本の番組の視聴頻度」を取り上げ、インタビューテスト後、質問紙によって「ないです」形を使用した学習者がどのようなインプット環境にいるのかを調査した。質問紙調査は韓国語で行った。

(1) 日本滞在歴

日本に滞在している期間が長ければインプットの量も多く、自然な日本語習得が促されることが考えられる。表2に示した結果によると、上級段階の学習者は日本滞在歴が1年に渡る者もあり、特にその可能性が高いことがわかる。一方、初級、中級の学習者は半数以上が日本滞在歴1カ月未満であり、継続的にインプットが多い環境にいたとは言えないことがわかった。

表2 日本滞在歴

	なし	1カ月未満	1カ月～11カ月	1年以上
初級(N=1)	1名(100%)	0名(0%)	0名(0%)	0名(0%)
中級(N=19)	5名(26.3%)	5名(26.3%)	9名(47.4%)	0名(0%)
上級(N=5)	0名(0%)	4名(80%)	4名(80%)	1名(20%)
合計(N=25)	6名(24%)	5名(20%)	13名(52%)	1名(4%)

(2) 日本語で話す友人の有無

日本に滞在している期間が短くても、韓国内に日本語で話す友人、知人がいて、インプットが得られる可能性がある。表3は普段の生活における日本語で話す友人の有無について調べた結果をまとめたものである。

表3 日本語で話す友人の有無

	いる	いない
初級(N=1)	0名(0%)	1名(100%)
中級(N=19)	6名(31.6%)	13名(68.4%)
上級(N=5)	5名(100%)	0名(0%)
合計(N=25)	11名(44%)	14名(56%)

上級段階の学習者は日本語で話す友人がいて、話す頻度は「一週間に3回」「一ヶ月に2回ぐらい」「一週間に5回」等、一ヶ月に複数回日本語で話す機会を得ていることがわかった。一方、初級、中級段階の学習者の場合は半数以上が日本語で話す友人がいない。中級段階の学習者は6名「いる」と答え、話す頻度は多く人で「一週間に一度」、「一ヶ月に2回ぐらい」「二か月に3回ぐらい」話すことがあるという回答があった。

(3) 日本の番組（ドラマ、映画など）の視聴頻度

自然習得のインプット環境の可能性として、日本の番組の視聴も考えられる。ここでは、日本のドラマや映画などの視聴の頻度について尋ねた結果を示す。

アンケートの結果、こうしたメディアに全く接していないという学習者はおらず、一ヶ月に一回程度はこうしたメディアに接しているという学習者が

大部分であり、中級段階ではほぼ毎日見ているという学習者も存在した。

表4 日本の番組の視聴頻度

	一年に数回	一ヶ月に数回	一週間に数回	ほぼ毎日
初級(N=1)	0名(0%)	1名(100%)	0名(0%)	0名(0%)
中級(N=19)	1名(5.3%)	9名(47.4%)	5名(26.3%)	4名(21%)
上級(N=5)	1名(20%)	2名(40%)	2名(40%)	0名(0%)
合計(N=25)	2名(8%)	12名(48%)	7名(28%)	4名(16%)

4. 2. 2 「ません」形と「ないです」形の使い分けに関する意識

質問紙調査において否定丁寧形「ません」形と「ないです」形の2形式について学習者が知っているか、2形式の使い方の違いについて説明を聞いたことがあるか、使い分けに基準はあるか、について尋ねた。

(1) 初級学習者 (N=1)

2形式があることは知っているが、その違いについては気になったことはない。説明を聞いたこともなく、使い分けの基準もないという回答であった。

(2) 中級学習者 (N=19)

2形式があることを「知っていた」と答えた学習者は14名、「知らなかった」と答えた学習者は5名であった。「2形式の使い分けについて説明を受けたことがあり、その内容を覚えている」と答えた学習者は4名で、『ません』のほうがもっと丁寧(3名)、『ません』は会話体、『ないです』は文章体(1名)だと答えていた。

使い分けの基準については良く分からないとする学習者が多かったが、2形式の使い分けについて説明を聞いたことがない学習者であっても、次のような使い分けがあるのではないかと推測する学習者が見られた。

- ・「ません」=丁寧、「ないです」=くだけた言葉
- ・年上の人には「ません」を使う
- ・「ないです」のほうが自分の意思がもっと強く現れるような気がする
- ・知人や友だちには「ないです」を使い、目上や知らない人には「ません」を使う
- ・自分より確実に年上の場合や初対面のときは大体「ません」を使い、親しいと感じていても敬語を使う必要がある場合は「ないです」を使うことが多い
- ・会話で、親しい間柄では「ません」より「ないです」を使う
- ・最初に思い浮かんだ形式を使う
- ・「ません」のみ使用

(3) 上級学習者 (N=5)

2形式の使い分けについて「知っている」と答えたのは5名全員で、使い分けについての説明を聞いたことがあると答えたのは2名であった。しかし1名はその内容を記憶に留めておらず、もう1名は『「食べません」は本当に食べられない場合で、『「食べないです」は食べたくない場合に使う』という内容だったと記憶していた。その学習者は「ないです」形をよく使うと振り返っているが、特に2形式の使い分けの基準はもっていないと答えていた。他の学習者は『「ません」は硬い感じで『「ないです」は会話体で柔らかい感じ』のように捉えていた。

5. まとめ

ここでは3. で提示した研究課題に基づいて結果をまとめ、本稿において見出された傾向について述べることにしたい。

まず研究課題の1つ目である海外で日本語を学ぶ学習者の動詞の否定丁寧形の使用実態について述べる。今回は海外の日本語学習者の一ケースとして韓国で日本語を学ぶ大学生を対象とした。インタビューにおける動詞の否定丁寧形使用者53名のうち「ないです」形での使用は25名で、日本語の口頭能力レベルの向上に伴い、「ないです」形の使用割合が高くなっていることが

わかった。この結果は「日本語能力の向上とは、規範的な文法の習得を意味するわけではない」とする川口(2006)の報告と一致するものである。初級段階の学習者の発話においては「ません」形が多く見られたが、誤用の中には「ないです」形を産み出そうとした際に生まれたものと思われるものが見られた。初級学習者の発話にのみこのような「ないです」形の誤用が確認されたことから、動詞の否定丁寧形「ないです」形の産出は初級段階からその兆しが見られるが、否定形を作る際に活用の混同や使用する動詞の選択を誤る、という習得過程があるのではないかと推測された。「ません」形が使用された動詞と「ないです」形が使用された動詞の難易度や活用のグループによる違いに関しては、今回のデータでは明確な傾向を見出すことができず、先行研究においてトークン頻度とタイプ頻度が高い動詞の否定形、つまり周囲からのインプットとして頻度が高いとされる動詞の否定形の使用が顕著に学習者の発話、アウトプットに現れているという結果を得ることはできなかった。

次に、研究課題の2つ目、「ないです」形を使用した学習者の背景や2形式に対する意識について明らかになった点を述べる。質問紙調査において学習者周囲のインプット環境について調べた結果、上級学習者は一定の日本滞在歴を持っていたり、普段日本語で話す相手がいたりして日本語母語話者からの十分なインプットを得る環境にいる(いた)ことがわかったが、一方で、日本滞在歴が1ヶ月未満と短く、普段日本語で話す友人や知人もなく、日本の番組の視聴頻度も少ない学習者、つまり十分なインプット環境を持っていないと思われる学習者も中級段階に4名、初級段階に1名いたことがわかった。この5名はインタビュー後、2形式の使い分けについて尋ねられた質問に対しても、授業で説明を受けた経験もなく、使い分けに対する意識、基準もないと答えており、「ないです」形の使用は無意識に行われていたことが確認された。

澤邊・相澤(2008)は「母語話者間で見られる日本語の「ゆれ」は海外の日本語教育、学習にも少なからず影響を与えている」と述べたが、母語話者が影響を与えたのか、学習者が文法習得の過程でこのような「ないです」形を産み出したのかは十分に明らかにされていなかった。本稿のデータは限られたもので、今後十分なデータを得て調査する必要があるが、今回、周囲からのインプットの影響と学習者のアウトプットとの関係が発話データの中で十

分に検証されなかったこと、周囲に十分なインプット環境がない初級、中級段階の学習者も「ないです」形を使用していること、また、初級から中級段階に移行する過渡期に「ないです」形の誤用が見られたことから、学習者の「ないです」形の使用に関して次のような可能性が考えられる。それは、「ないです」形は学習者自ら産み出す文法の一つであり、日本語母語話者との接触やメディアの視聴などにより周囲からのインプットが増えるにつれ、自然な日本語として習得されるという可能性である。2形式の使い分けについて質問紙調査を行ったところ、中級段階の学習者のコメントの中には「丁寧さ」「スタイルの違い」に言及するものが複数見られた。特に2形式についての説明を聞いたことがない学習者が、このように文のスタイルや場面、状況によって否定丁寧形が使い分けられ、「ないです」形のほうが非規範形で、「ません」形のほうが丁寧に話すときに使われる規範的な形であるという気づきを持つのは、実際の使用場面を耳にしたり見たりすることがあるからではないかと推察する。「ないです」形が自然な日本語として習得されていく過程で、どのような場面、状況で使用されるものなのかも感覚的に理解されるようになっていのではないかと考える。

では、なぜ学習者独自の文法として「ないです」形が産み出されるのだろうか。本調査では学習者へのフォローアップインタビューを実施していないため、この点については十分に明らかにできなかった。い形容詞の否定丁寧形は「おいしくないです」のように「～くないです」、つまり「ないです」形で導入、練習されることが多い（小林2005）。品詞によって異なる否定形の作り方を覚え、使用するのは学習者にとって負担であり、そのような文法規則は不合理な文法規則（野田2001）のように思われるかもしれない。動詞の「ないです」形はそのような不合理さを合理的な文法規則に変えようとする中で生まれたものなのだろうか。川口（2010）は母語話者の動詞否定丁寧形「ません」形から「ないです」形へのシフトに関わる要因について考察し、「否定」という文法的意味がシフトの要因となっている可能性を示した。「否定」を伝達するときに「ないです」形を用いるのは否定の意味が伝達されやすい「聞き手の理解しやすい形式」を作りだそうとする言語変化の要因だとするものである。「否定」という文法的意味が要因となっている点は学習者の場合も同様のことが言えるかもしれない。今後、学習者へのフォローアップインタビューなどを通して明らかにしていきたい。また、このような学習

者の否定丁寧形の習得プロセスを踏まえ、実際の教室で動詞の否定丁寧形についてどのような学習の機会を提供するべきか、具体的に提案することを次の課題としたい。

【参考文献】

- (1) Bybee, J (2008) Usage-based grammar and Second Language Acquisition. Robinson, P. & Ellis, N. C. (eds.) *Handbook of Cognitive Linguistics and Second Language Acquisition*. 216-236. NY and London: Routledge.
- (2) 家村伸子 (2001) 「日本語の否定形の習得－中国語母語話者に対する縦断的な発話調査に基づいて－」『第二言語としての日本語の習得研究』4, pp. 63-81
- (3) 家村伸子・迫田久美子 (2001) 「学習者の誤用を産み出す言語処理のストラテジー (2): 否定形「じゃない」の場合」『広島大学日本語教育研究』11, pp. 43-48
- (4) 金澤裕之 (2008) 『留学生の日本語は、未来の日本語－日本語の変化のダイナミズム』ひつじ書房
- (5) 川口良 (2006) 「母語話者の「規範のゆれ」が非母語話者の日本語能力に及ぼす影響－動詞否定丁寧形「(書き) ません」と「(書か) ないです」の選択傾向を例として－」『日本語教育』129, pp. 11-20
- (6) 川口良 (2010) 「「ません」形から「ないです」形へのシフトに関わる要因について－動詞否定丁寧形の言語変化という視点から－」『日本語教育』144, pp. 121-132
- (7) 小林ミナ (2005) 「日常会話にあらわれた「～ません」と「～ないです」」『日本語教育』125, pp. 9-17
- (8) 澤邊裕子・相澤由佳 (2008) 「否定丁寧形「～ません」と「～ないです」に関する一考察－ことばの「ゆれ」が海外での日本語教育・学習に与える影響－」『日本文学ノート』43, pp. 170-183
- (9) 野田春美 (2004) 「否定でいいい形「ません」と「ないです」の使用に関する要因－用例調査と若年層アンケート調査に基づいて－」『計量国語学』24-5, pp. 228-244
- (10) 野田尚史・迫田久美子・渋谷勝己・小林典子 (2001) 『日本語学習者の文法習得』大修館書店

- (11) 森山新、ナイダン・バヤルマー (2009) 「動詞・形容詞の否定形のイン
ブットの頻度と習得との関係」『日本認知言語学会論文集』9, pp. 320-327

インタビュー場面における動詞の否定丁寧形の使用とその要因について

— 韓国の日本語学習者の発話データから —